

卒業式式辞

霞のかかった青空と、ようやく満開を迎えた路傍の梅の花にも春の兆しを感じるようになりました。この良き日に、宮崎県立福島高等学校第七十七回卒業証書授与式を挙行できますことを心から感謝申し上げますとともに、串間市長 島田俊光様、宮崎県議会議員 武田浩一様をはじめ、多くの来賓の方々のご参列に、厚く御礼申し上げます。

卒業生の皆さん。卒業おめでとう。

保護者の皆様方。改めてお子様のご卒業、おめでとうございます。

皆さんは、いま、目の前にいるお子様の姿を、どのような思いとともに見つめていらっしゃるのでしょうか。

おなかを蹴られたときの喜びでしょうか。初めて産声を聞いた時の感動でしょうか。

それとも、熱を出した我が子を抱き、病院におかった時の不安や焦りの気持ちでしょうか。

はたまた、運動会で、部活動で、発表会で生き生きと活躍する姿に沸き起こった誇らしさかもしれませんね。

親子であることに終わりはありません。しかし今日は、ここに至るまでの二〇年間のお子様とのやりとりや、子育ての楽しさ、苦労を偲んでいたくと同時に、お子様方の、これから大きな社会へと旅立つ、希望と自信に満ちた、たのしい今の姿を目に焼き付けていただき、成人となった大切な我が子を、何の迷いもなく、社会に送り出しましょう。二〇年間の子育て、本当にお疲れ様でございました。今日一日はちよつとほっこり、なさってください。

さて、卒業生の皆さん。ここで改めて問いたいと思います。

「君たち、いや、僕たちはどう生きるべきであるのか」と。

いま、世界は、新たな対立・混乱の中にあります。

人類は、全世界共通の課題として立ち現れた新しい感染症に対して、一丸となって立ち向かいました。その感染症の脅威が薄れた今、これまで隠されてきた、富の偏在に代表される経済の格差。政治の不安定や差別の問題。資源や宗教を背景にした国境を巡る緊張。このような問題が改めて浮き彫りになり、その解決のために世界各地で、話し合いや歩み寄りではなく、武力が用いられています。

また、多様性を認め合い、さまざまな価値観を許容し合いながらすべての人が幸せになろうという、共生社会の確立が言われています。しかし、日本、広く世界に目を向けると、果たして現実はどうなっているのでしょうか。

ここでもまた、「対立」を煽り、敢えて敵を作ることによって自分たちの正当性を声高に主張するような社会になってはいまいか？

「儲かるか儲からないか」「カネが多いか少ないか」が基準のすべてとなってしまう、目の前の「お金」の多さにはかり目が向けられる、価値観の固定化が起こってはいまいか。

SNSのフォロワー数こそが正義であるかのような風潮の中で、大きな声を出して、目立った人こそが善であるかのような社会の中で今、改めて僕たちはひとりひとりが自らに向かって問いかけ、自分の言葉で、自分自身の直接の行動で自分らしい生き方を探し出し、実践して行かなければならない、大変生きづらい時代となっています。

卒業生の皆さん。

今日は、そんな時代に生きる皆さんに、春を告げる梅の花と、福島高校のシンボルである樺に寄せて、3つのことを心にとめてもらいたいと思っています。

一つ目が、決して目立たなくても良い。しかし自分の居場所にしっかりと自分の足で立ち、そこになくてはならない人間となるべく勉め励んで欲しいということ。

二つ目が、忍耐強く、自分らしく生きることを諦めない人間でありつづけて欲しいということ。そして三つ目が、明るく朗らかに澄んだ心で自分自身と、一番身近にいる家族を愛し、慈しみ続ける人間となって欲しいということです。

卒業生の皆さん。

決して目立たなくても良い。しかし自分の居場所にしっかりと自分の足で立ち、そこになくてはならない人間となるべく勉め励んでください。

僕はこの季節になると、道の傍らにある梅の木に目が行きます。

梅の樹は、花をつけていないときはまるで枯木のようにです。樹皮はごつごつとして色黒く、決して美しくありません。また、道端の梅は一株、二株で独立して植わっていることが多いので、普段は特に目を引くことのない樹木です。しかしその樹に、立春を境にして可憐な花が咲きます。一輪ずつの花は小さいが、一本の木につく花の多さもあって、ある日突然、その存在を誇示しようとしているかのように姿を見せます。そして梅の素晴らしさは、そうして花が咲いてみれば、その場所にはその梅の花が咲くことが、その梅の樹のあることが当然なのだということが納得できてしまうその存在感です。

卒業生のみなさん。普段、決して目立たなくても良い。人の目を引くような美しさがなくても良い。無骨で、時に取っ付きづらい、そんな生き方でもかまわない。それぞれが、それぞれの居場所をみつけ、その場所にしっかり根を下ろして生きて欲しい。折々に見せる美しさ、素晴らしさが人に愛され、無骨さとその裏側にある美しさが、それぞれの生きている場所になくてはならない、そんな存在になって欲しい。そう思います。

卒業生の皆さん。

忍耐強く、自分らしく生きることを諦めない人間であり続けてください。

福島高校のシンボルである校庭の樺の木は、100年を超える長い間、福島高校生を見守ってきました。知っていましたか。樺の木は、京都清水寺にある清水の舞台を支える柱として使われていることを。そしてその樺の柱は、400年間、修理されながら舞台を支え続けていることを。

樺の木は耐久性が高く、時間が経てば立つほど味わい深さのてる、個性的な美しさを持つ高級木材となるのだそうです。しかし反面、一本一本の木の個体差が大きく、均一のものが大量には取れづらいことや、材料にするまでに他の木よりも手間暇がかかるという特徴もあるのだそうです。

福島高校で学んだ君たちも、まさに、この樺のように生きて行って欲しい。皆と同じでなくても良い。時間がかかっても良い。自分らしい色、自分らしい味わいとは何なのかを常に自問自答し、生きて欲しい。目立たない下支えをする存在であっても良い。名前を知られなくても良い。自分らしさをさがし、あの清水の舞台を支え続ける樺の柱のような、強く生き続けることを諦めない人間であってください。

卒業生の皆さん。つねに澄んだ心で明るく朗らかに、自分自身と自分の家族を愛し、慈しみ続けてください。

人間は例外なく、独りでこの世に生まれ、独りで死にゆく存在です。

そのあまりにも孤独な始まりと終わりの間で、人はたくさんのお会いを果たします。まず、「自分」と出会います。自我の芽生え、として学校でも学びますね。その後、他人とお会い、さまざまなお出来事とお会いながら生きていきます。

生きることは、楽しいことばかりではありません。しかし、自分を大切にすることを決して諦めてはなりません。同時に、自分をこの世に送り出してくれた親、ともに育った家族、そして自分がこれから作るであろう新しい家族を大切にしましょう。また、楽しく幸せだから笑顔になるのではなく、明るく朗らかに笑顔であるから幸せになる、と言われます。他人を妬むのではなく、明るく朗らかに、澄んだ心で自分や家族を愛することが出来れば、そうすれば必ず、人を支え、人に支えられる良い人生を送ることが出来ます。

ちなみに、梅の花言葉は、澄んだ心、忍耐。櫻は幸運、健康、長寿です。

それでは最後に、大好きな詩人・茨木のり子の詩を餞とし、式辞を終えたいと思います。

「自分の感受性くらい」

茨木のり子

ばさばさに乾いてゆく心を

ひとのせいにはするな

みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを友人のせいにはするな

しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを

近親のせいにするな

なにもかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを

暮らしのせいにはするな

そもそもがひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を時代のせいにはするな

わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい自分で守れ

ばかものよ

来賓並びにご参加いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます、式辞といたします。

令和七年三月一日

宮崎県立福島高等学校 校長 吉田 重樹